

## 題一 酒の絶縁状

宰 府 倂

そのとき吐血していたならば、彼はチュウチョすることなく絶縁状をたたきつけていたであろう。日々吹雪に見舞われていた、まこと単調孤立感に身の襲われるある日、都会の一隅で体臭にむせびつかウンターの上に、琥珀色に輝く液体に魅せられ些やかな喜びを求めた、かつての雰囲気の再現された新装の茶屋での一杯が、おそらく彼の胃袋の限界能力を破ったのであろう、爾来不快な胃の調子に鬱々として楽しまず、常に絶縁状を懐にしのばせながらその勇気を失い時折りの帰郷にM医院で15日分の薬袋を求めては運びて治療を試み、たまさかの日にその効果測定とコップを傾け再び病の治らざるを知りて薬にしたしむ雪国の生活も、ようやく太陽の恵は四界の様想を一変し、久方の黒土に生命の鼓動を感ずる頃、度々の酒席にジュースを徳利に入れる等の苦闘の甲斐あってか快調子を取りもどしたようである。

勿論、M医院の主治医の診断結果ではない。突然、彼の転地が決まり、2ヶ年に亘る此の地との袂別の時、愛する幾十人かの人々との別離を以前都会の体臭を求めたコップに惜情をたたえて取りかわした連続一週間に亘っての経験が、病すでに治癒せりと判断させたのである。

彼の喜びは異常のものであったように聞いている。少くとも、バッカスの恵に浴す限りにおいて、彼は

彼の生活に力強い足音を聞くことが出来たのである。

勿論ネストン、グロンサンの方が与かるに大きいものであったろうが、此の頃の彼は日々の労働に喜びを知り時折りの蛮勇は暗夜を睥睨したり等して夜の風紀は多少ながら乱れたようでもある。

然し、このことは彼の日常には許されてよかろう。おそらく酒をたった頃の彼のファイトは見るに哀れを留めた程であった故に。

けれども傷ついた彼の肉体は、それほど長くは彼に自由を与えなかったようである。

ようやく年の瀬も迫り、逝く年に限りない慕情をこめたおごそかな宴は、急転直下、彼を悲哀の底につきおとしたようである。

如何にスポンサー達が四六時中彼等の貪欲な営利の武器を具して肝臓強壯剤の販売に躍起となってもその声を聞く耳をもたない彼には吹きすさぶ寒風のウナリ声にしか聞きとれない。

最早、酒への絶縁状をバッカスに捧げ、静かに去り行く一筋の小路が彼方の荒野に通ずるのみである。

1956年の初冬、大学のK先生が彼の転地の因が「酒と肉体の相関々係にありと聞く」と冗談にかこつけ自重を促した言に今こそ彼は首をたれるべきであろう。

## 題二 酒に想う

脳髓がアルコールに酔いしびれて、日頃の潜在意識を堂々と発表し行動する人生におけるそのチャンスに、酒にしたしみ、酒の魔力に魅せられた彼は、こよなき慕情を寄せる。

1月号に酒の訣縁状を奉呈しそのチャンスを失なう失意にある彼は、アルコールの叱責をうけつつ綴った訣縁状が公開される機会を捕えて正式な欲望断絶の生活を送らんと都合よく意を決している。己れの力によって果し得ない余りに弱い意志に支えられた彼が最後に選ぶ途は、体の徹底的な破壊を待つか、或は外部から拘束を受ける環境を作る以外にない。

後者の途を選んだ彼が、医者診断にいくらかカケネのあることを期待し、更には訣縁状が公開されぬ不幸をよろこび、コップの中の魔葉に身の悲哀を忘れ、病状の自覚を忘れて愉快の極をエンジョイし酒によって酒の訣宴をひろげつ筆をとったのが此の稿である。

想えば、忘れ得ざるは酒、思い出は酒、俗人のウツプンは酒、人の情を交換し意気投合するは酒、慰安を与え明日の英機を与えるのは酒である。駄文を書きあげるのも酒である。一夜あけてフトコロの寂しさを覚えしめるは小人の酒である。

しばしば繰り返えず津山、岡山間の退屈な2時間、舌をなめずりながら岡山駅のプラットフォームに降り立ち、急ぎて町の一隅に足を走らせるは冬の夜空に彼が知る愉悦の一瞬である。

1月13日、恒例の微酔にさまよいて融紅鸞著随筆極楽女房なる一書を求めた。日頃の女房恐怖の故にあらず、彼女は大の酒飲の由と聞きてである。

世の中に酒と恋愛がなければ実に味気ないもので

あると前書して真の酒飲む人々の心理をうまく表現している。

辛党の弁と題するこの稿の終る頃、思えば酒と恋愛は人生の五味である。これあってこそ味な世の中が生まれるのであるとして結んでいる。

恋愛という人間の愛の行動はさておき酒飲む者のみが知る酒あって人生50%の意義、彼女に教えられたようである。

酒をやめなければならないという冷厳な現実に立たされるとき、禁ぜられると破りたくなるのが人間の心理、軽く一杯はよからずやと、いらぬ理屈に呑む酒の味そのうまさ、陶然たる酔心地こそ、忘れ得ざる醍醐味である。

病を知りて酒の味を知るとは生意気な言辞かとも思うが了とされよ。

過去幾回か微酔に筆を取って光輝ある本誌をけがし、いままたコップで痛飲する感激を一筆に托し、千鳥足なる駄文を間近かにせまった訣宴の辞文としたい。